

コミュニティに着目した災害公営住宅の現状と課題について

福島工業高等専門学校○学生会員 原匡彦
正会員 齊藤充弘

1. はじめに

現代の日本社会では、高齢者の社会的孤立、地域における若者の無縁社会などの問題が起きている。これに伴い地域コミュニティが著しく崩壊する状況に陥ってきており、十分なまちづくりに取り組むことができないという危険性がある。コミュニティに着目してみると、東日本大震災以降のいわき市においては、大震災直後は近隣の安否確認や支援物資の配布などにおいて、地域コミュニティがうまく機能しなかった例を多くみることができた。その後の復旧・復興期においては、災害公営住宅や復興公営住宅に移り住んだ人々の間では、それまで別々の地域に住んでいた人が集まっているため、各種習慣の違いや地域交流の仕方に違いが存在することにより、地域におけるコミュニティ形成は大変困難となっているケースをみることができる。

本研究は、災害公営住宅立地地域を対象として、コミュニティ形成の実態について明らかにすることを目的とする。具体的には、災害公営住宅団地内での日常生活の問題を明らかにして、団地内コミュニティや住民どうしの交流についての考え方について調査・分析していく。

2. 研究対象と方法

いわき市においては、市内で地震や津波により被災した住民を対象とする市営の災害公営住宅と同じ浜通り地域の原子力発電所立地地域からの原発事故による避難者を対象とする県営の復興公営住宅が建設されている。災害公営住宅は7地区16団地に1,513戸、復興公営住宅は10地区17団地に1,768戸と市内各地に分散して建設されている。そのため、その立地条件はさまざまであり、災害公営住宅については市街化区域に10団地、市街化調整区域に5団地建設されている。本研究では、このうち津波被災地であり、市街化調整区域に該当する薄磯団地および沼ノ内団地を対象として、アンケートを通して日常

生活や住居、コミュニティの現状について調査・分析していく。アンケート調査の概要を表1に示す。調査は、団地内での生活について「日常生活で困っていること」や「団地内での設備環境について」、「団地内の住民どうしの交流について」など22項目より構成されている。回収率は、薄磯団地70%、沼ノ内団地62.5%であった。両団地ともに5階建ての集合住宅が2棟建っているなかで、薄磯団地のほうには戸建住宅も18戸（2LDK:9棟、3LDK:9棟）建設されており、薄磯団地のほうには集会所も設置されている。

3. 団地内での生活について

3.1 日常生活で困っていること

「日常生活で困っていること・不便なこと」についてみたものが、図1である。これをみると、薄磯団地では「買い物」の回答割合が41.6%と最も高く、次いで「交通手段」の22.8%、「通院」が17.8%となっている。薄磯団地は、沿岸の津波被災地で復興事業が進む地域に隣接する形で建設されており、元々は農地であったところで、周囲も山林や未利用地に囲まれた地域である。そのため、周囲には買い物をはじめとする都市機能が集積していないことより、そのことが表れる形となっている。一方、沼ノ内団地についてみると、「公民館・集会所」の回答割合が50.0%と最も高く、次いで「買い物」が16.7%、「交通手段」が12.5%となっている。沼ノ内団地は、薄磯団地と同じく市街化調整区域に該当する一方、県道に面しており、第一種中高層住居専用地域に隣接している。そのため、コンビニや飲食店が近隣に立地しており、薄磯団地とは周辺環境が異なる状況にある。一方、団地内に集会所が設置されていないため、そのことが表れる形となっている。両団地ともにバス路線をはじめ公共交通機関に乏しいため、通院をはじめとする交通手段があげられている。

表1 アンケート調査の概要

調査期間	2016年12月
調査方法	配票調査法
調査対象 (配布・回収数)	薄磯団地・沼ノ内団地 (100・70)・(32・20)
調査項目	・自身のことについて
	・団地内での生活について
	1 日常生活で困っていること
	2 日常生活で心配なこと
	3 住宅の設備環境について
	4 団地内の設備環境について
	5 団地内の住民どうしの交流について
交流する機会、交流会の参加意欲、関わりのある人について、大震災後の交流の変化、交流の必要性、生活への満足、将来の生活についての希望、ボランティア・支援団体への希望	
・自由記述	

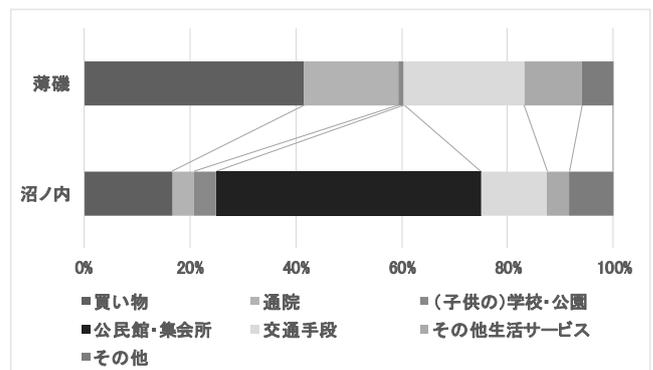


図1 日常生活で困っていること・不便なこと

キーワード：コミュニティ、災害公営住宅、まちづくり、防災・減災

連絡先：福島工業高等専門学校建設環境工学科 〒970-8034 福島県いわき市平上荒川字長尾 30 ⅴ:0246-46-0830

3.2 日常生活で心配なこと

「日常生活で不安なこと・心配なこと」について図2にみても、薄磯団地、沼ノ内団地ともに「災害発生時の対応（防災）」の回答割合が46.2%、44.4%と最も高くなっている。調査前の2016年11月22日（火）には、午前5時59分頃に福島県沖を震源とするマグニチュード7.4の地震が発生し、最大で高さ1.4mの津波も観測された。その際に、両団地の住民ともに大きな揺れを感じ避難行動をとっている。また、団地内の地割れや建物のひび割れが発生しており、そのことによる災害に対する不安・心配が表れた結果であるということが出来る。次いで、薄磯においては「外出機会が少ない」ことが20.0%と高くなっているものの、沼ノ内においては7.4%に止まっている。このことは、先にみた団地が立地する周辺環境の違いが表れているものということが出来る。さらに、県道に面する沼ノ内においては、「交通事故」が22.2%と高くなっていることに対して、薄磯においては7.4%に止まっていることにも表れており、団地が立地する環境が住民の日常生活に影響を与えていることがわかる。

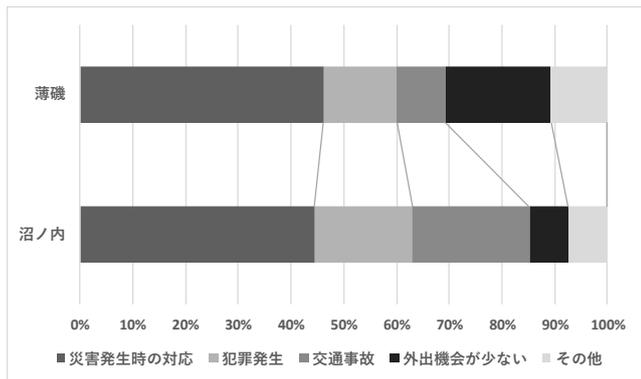


図2 日常生活で心配なこと

4. 団地内コミュニティについて

4.1 交流する機会

「団地内の住民どうしの交流」について、機会があるか、参加しているかについてみたものが図3である。最も身近な「挨拶」についてみると、その回答割合は薄磯が32.9%、沼ノ内が26.2%となっており、団地内の世帯数が多い薄磯において高くなっている。その他の機会については、「おしゃべり」については薄磯14.0%、沼ノ内14.8%と同程度であるものの、「集会・会合」が薄磯17.1%、沼ノ内13.1%と集会所がない沼ノ内において低くなっている。

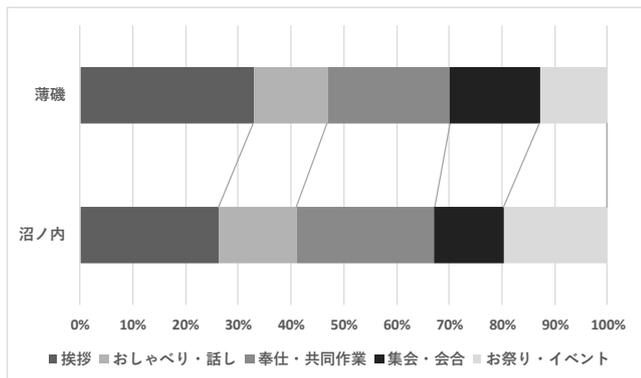


図3 団地内の住民どうしの交流する機会

4.2 住民交流の変化

「大震災前後を比較して、住民どうしの交流に対する変化はありましたか」という設問に対して「知り合いが少なくなり、交流も少なくなった」という回答割合が薄磯52.9%、沼ノ内46.8%となっており、ともにおよそ半数を占めている。また、「知り合いが増え、絆が深まった」という回答については薄磯17.7%、沼ノ内11.8%となっており、団地内の住民どうしの交流が課題であるということが出来る。

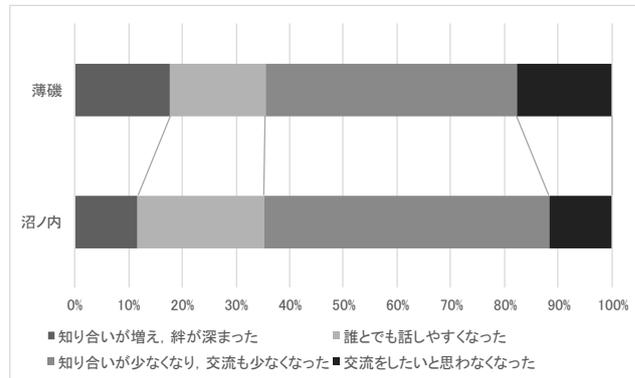


図4 大震災前後の住民交流の変化

4.3 団地での生活についての満足度

「現在の団地での生活」について、「とても満足」、「どちらかといえば満足」、「どちらともいえない」、「どちらかといえば不満」、「とても不満」の5段階により評価してもらった。それを4点～0点まで点数化したところ、その平均点は薄磯2.4点、沼ノ内2.3点と同程度の結果となった。そのため、両団地ともに満足していない人が多いことがわかる。このうち、先にみた「住民交流の変化」において「知り合いが増え、絆が深まった」と回答した人は、その満足度が薄磯2.9点、沼ノ内1.5点、「誰でも話しやすくなった」と回答した人は、その満足度が薄磯2.6点、沼ノ内2.5点と点数が高くなっているのを見ることが出来る。

5. おわりに

いわき市内における2つの災害公営住宅を対象とした調査・分析の結果、第一に、団地内への集会所の整備や団地が立地する周辺環境が住民の日常生活に影響を与えており、その環境の違いにより住民の評価が異なることを明らかにすることができた。第二に、団地内コミュニティについてみると、大震災以前と比較して多くの人と交流する機会が少なくなっているなかで、交流する意思があり、その機会に参加している人とそうでない人がいることがわかった。第三に、団地での生活については、全体としてその満足度は高くないなかで、知り合いが増えたり、誰でも話しやすくなったという人は、その満足度が高い傾向にあることがわかった。大震災前と比較して住宅としての設備、環境に不自由を感じるなかで、コミュニティの形成は、日常生活における不安解消や楽しさの創出につながるものということが出来る。

参考文献

- 1) 中田実・山崎丈夫・小木曾洋司 地域再生と町内会・自治会 自治体研究社 2012年
- 2) 都市計画 302 「特集 解題：都市継承期のコミュニティモデル」 日本都市計画学会 2013年